我が心のギレスン

小佐　美智子

空はあくまでも青く澄み渡り、海面は太陽光線を反射してきらきらと輝く。 船の汽笛が鳴り、かもめはやるせない声で鳴く。 広い甲板では人々が、あちこちに置かれた円テーブルを囲んでチャイ（紅茶）やソーダ水を飲みながら談笑している。

ときどきはじけるような笑い声があがる。イスタンブールを出航し、ボスポラス海峡を縦断する形で北上するのがこの連絡船だ。船は海峡を通り抜けた後、黒海沿岸の各港へと順次入港していく予定である。 乗客は、殆どイスタンブールで所用を終え黒海沿岸の自宅へ帰るトルコ人たちである。 先を急ぐ旅行者なら目的地へ空路を飛ぶし、空港のない町へなら、長距離バスを利用する。 時間と費用のかかる船旅をすることはあまりない。 乗船客の殆どが遊覧目的の観光旅行者か、時間の制約を受けないで生活をしている人たちである。

八坂雄介はそれらのトルコ人たちに混じっていてもまわりに全然違和感を与えない。 彼はこの甲板にいて談笑する男たちと外見上はなんら変わるところがないのだ。やっぱりトルコ人の血が混じっているからだと自分で納得するばかりだった。

肩からカメラを下げている。彫りの深い顔にサングラスが良く似合う。実際、ここイスタンブールの陽光は、六月とはいえかなり厳しい。サングラスなしで太陽光線の中に長時間身を曝すのは危険でさえある。視力はカメラマンの彼にとっては大切な道具でもあるのだ。

黒海廻りの船はイスタンブール旧市街のエミノニュから週一回だけ出航する。ここを午後一時に出航した連絡船に乗り、彼は今、黒海とマルマラ海との間を結ぶボスポラス海峡を北上する船の中である。

三十九才、独身、フリーのカメラマンである雄介は、日本人でいながら、それらしくない容貌をしている。 彫りが深く、色は浅黒い。 手足もすらりと長く、何処からみても外国人のような風貌である。身長は一八〇センチくらい、目や髪の毛は漆黒である。 その筈、彼の父親はトルコ人だといわれている。 しかし、彼は未だ逢ったことがない。彼が物心ついた頃には父は

もういなかった。だから、彼には、まったく、父親の印象がない。　小学校時代から、友人達に
『ガイジン』　だの「トルコ人」だのとからかわれてきた。差別さえ受けてきた。　そんな時母親
は必ず、雄介をかばい、
「同じ人間ですよ。日本人も外人もないでしょ」
とからかう友達に言い聞かせ、彼の盾になってくれた。
子供心にも美しい母親だった。特に大きく黒い目と、笑ったときに頬にできるえくぼが雄介
はたまらなく好きだった。
「お母さん、どうして僕にはお父さんがいないの？」
幼い雄介が尋ねる度に、母はちょっと困ったような表情をして、彼の顔を真剣な目で見つめ、
「雄介が大人になったら話してあげる。だから今はお母さんと二人して仲良く暮らして行こ
うね」
と、母はやさしく雄介の頭を撫でた。雄介も、
「うん。約束だよ」
と言って納得してきた。だから、彼はその時を心待ちしながら大学に通い、成人し、そして、
カメラマンの職業を得た。　それなのに、母はその約束を果たさないままに、二年前まだ六十
一才の若さで痴呆症にかかってしまったのだ。　現在、神戸市の郊外にある桃山老人福祉施
設で養護を受けている。母の様子がおかしいのに気がついたのは二年前だった。　彼は、ずっと
心に持ち続けた「例のこと」を今日こそはと決意して持ち出したときのことだ。
「お母さん、いつかおやじのこと話してくれるって言ったでしょう」
その時、母は無邪気な表情を見せて言った。
「あら、おやじって誰のこと？わたし知らないわよ」
冗談を言っているのでもなさそうだ。まじめな顔をして言う母の顔を雄介はまじまじと見つ
めて次の言葉が出なかった。
この時のショックを雄介は忘れることができない。
もう、この頃すでに母の痴呆は始まっていたのだ。
それから雄介は母が少しでも元気なうちに自分のルーツを知りたいと思うようになってき
た。　未だ見ぬ父親のことをこんなに知りたいを思っている彼に向かい母は忘れたと言う。　彼
は悲しみを通り越して絶望感さえ憶えた。
悩みに悩んだ挙句、彼は自分で探してみようと心に決め、思い切って、トルコへの旅にでたの

だ。　カメラの仕事はフリーの立場ではあるし、最近、長期の旅行をして休んでも困らないだけの貯えもできた。　こういういきさつで彼は関西国際空港からトルコ航空の飛行機に乗り一路イスタンブールへと来たのだ。

ボスポラス海峡を北へ航行するこの連絡線の船足はかなり速い。船の出航時、右手後方に遠く見えていたトプカプ宮殿の中にある幾つもの丸いドーム型の屋根や尖塔などが瞬く間に後方に去って行った。

すぐに第一ボスポラス大橋をくぐる。海峡には大小の船が行き来している。　すぐ近くをすれ違った船の甲板でこちらに向いて立っている美女がいた。赤いスカーフで髪の毛をまとめ、耳たぶには直径十センチはあろうかという輪のイヤリングをしている。　目眉は漆黒、彫りが深い褐色の顔である。　前方を向いて立つ雄介に向かい　彼女は、

「メルハバ（こんにちは）！」と呼びかけてきた。

彼も無言で彼女に微笑みだけを返した。何も言葉は返さない。これから向かう自身のアドベンチャーに彼は少なからず緊張していたのだ。

舳先に立って見まわすと、右にアジア大陸、左にヨーロッパ大陸が一気に望める。この壮大な景色を見ていると、　彼の心の緊張は少しづつほぐれていく思いだ。

「ホリデイ？」

そばの椅子に座っていた五十がらみ口髭を生やしたおやじが声をかけてきた。

「まあ、そういったところだ」

彼は、ややあいまいにうなずき、この人懐こそうなおやじに白い歯を見せた。

おやじは片言ながら英語が話せるらしく、しきりに雄介に対して話しかけてくる。雄介がポケットからパーラメントの箱を取り出し勧めると、彼は嬉しそうに笑いながら、一本抜き取り、雄介の差し出すライターの火に煙草をかざした。

「日本人か？」

「空手はできるか？」

などと、おきまりの質問を浴びせてくる。

「写真を写してくれないか」

とまで言い出してきた。

おやじを適当にあしらっているうちに船はずんずん進み、第二ボスポラス大橋が見えてきた。

彼はこの橋には特別な思い出がある。　今から十七年前、大学四年生の夏休み、彼は中近

東

から小アジア一帯を貧乏旅行した。その時に建造されたばかりの第二ボスポラス大橋を撮影した。

カメラに関しては、その時すでに趣味の域を超えるばかりの腕前になっていたし、将来は写真で身をたてたいと考えていた雄介ではあるが、まさか、その写真がY新聞社主催の写真コンクールで佳作をとるとは思わなかった。この入賞をきっかけにして彼はプロの道へ足を踏み入れた。

ボスポラス海峡の中程、一番間隔の狭い位置に建設されたこの橋は、トルコのアジア側とヨーロッパ側とを繋ぐ有益な橋であり、自動車専用である。建設には日本の企業グループが携わっている。もう今から十八年くらい前に建てられた。橋の右側には遠くにアナドル・ヒサール、左側にはルーメリ・ヒサールの二つの要塞が見えた。一四五三年メフメット二世がコンスタンチノープルを攻めるときに短期間で建造させたという曰くつきの、石を積み上げたような堅固な要塞である。

ここを過ぎると海峡の両端は切り立った陸地の海岸線が続き、オスマントルコ時代の貴族たちのものであったという豪華な離宮が幾つも見えた。こんな立派なところに父の出身地はないだろう。雄介は一枚の写真を持っている。母の小抽斗から見つけた写真だ。

この人が父なのだろう。小さくて判りにくいが、若い男性が海をバックに立っている。そして、この場所が父の故郷なのだろう。藍色の水を湛えた海の岸辺から沖合いに背を向けて立ち、穏やかな笑顔を見せている。姿勢の良い三十才位の父だ。後方には遠くに小さい島が見える。

小さな漁港のようだ。随分と古い写真だ。この場所がどこかわかれば苦労はないのだが、彼の調査でこれが、黒海沿岸の小さな港の一つらしいことがわかった。これが何処なのか、このクルーズが終わるまでにはっきりさせようと彼は心に決めていた。今まで船中から見てきた限りでは、このボスポラス海峡の沿岸ではなさそうである。もっと黒海よりの方角のような気がする。

二時間後、船は海峡の最北端部まで近づいた。この場所は第三大橋の設計も予定されているという噂も聞いた。ボスポラス海峡も終わりに近い。その先はいよいよ黒海である。黒海に入ると船は東へ向けて進路を変える。明るい青の海峡から黒海へ入ったが、水の色は別に黒くはない。同じ青色をしている。違うところといえば、先ほどの海峡を通過するときに見えた大

きな邸宅や宮殿跡の華やかなたたずまいはあまりなく、　大きい港でも海岸は岩場でできている。かなり荒削りで、鄙びた港町が続いている。　海は何処までも広く、青々とし、海鳥が鳴いている。　このようにして、その日一日は海の上だった。

個室を確保しておいたので、夜はベッドでゆっくりと休むことができた。

部屋の丸窓から見ると、暗がりの中で海は不気味なくらい広く静かで、行き交う船はもうない。遠くに灯台の灯が見える。　彼はなかなか寝つかれなかった。　いろいろ今後のことを考えると不安になるが、不安に思っても仕方ないとすぐに考えを切り替えて今はともかく眠ることにした。　何のあてもなく、一枚の写真をたよりにはるかトルコくんだりまで来た自分がよほどものずきか、変わり者のように感じられる。しかし、と雄介は考える。

（今はそれは思うまい。　ただ自分の勘を信じて、やるべきことをやるだけだ）

翌朝は早く目ざめた。まだ六時だった。　洗面をしてから甲板へ出てみる。　右手側は何処までも続く海岸線、左手側は相も変らぬ海景色で、何処まで行っても同じように見える。沿岸の町々を洋上からながめても、あの写真に似た光景にはぶつからない。

朝食を甲板のテーブルで採った。　蜂蜜を塗ったパンとチャイ、きゅうりとハムのサラダというごく質素な朝食だが空腹を満たすには十分だった。

その日の午後四時、船はサムスン港に寄港した。　ここは黒海沿岸有数の大きな港町である。しかし、　ここも写真の場所とは違う。　もしかしたら自分は大変な見当違いをしているのかと疑問が湧いてくる。軽い失望感が心をよぎる。　しかし、心の中の一方で（これでいいのだ。このまま進め）という声が聞こえる。　船の甲板に立ち、黒海南岸沿いの町々をじっと見据えている雄介の姿がよほど気になるのか昨日の髭おやじがまたやってきた。

「イイ　アクシャムラール（こんばんわ）」

と挨拶しながら、人のよさそうな顔でにやりと微笑む。

それから、雄介の手にもっている写真のことをたずねた。

写真を見せながら雄介は聞いた。

「この場所がどこか知っているか？」

おやじはしばらくその写真を見た末に、

「これはギレスンじゃないか？」

という。
「遠いのか？」
「いや、この次の港だよ。　そうさね。これから二、三時間後くらいかな」
「え？そんなに早く？」
それならば、確かにここかどうか風景をよく観察してみなければならない。
だんだんギレスンに近づくにつれ風景が写真と似てきたような気がしだした。
沖に小さな島が見える。
『ギレスンで下船しよう』
雄介は意を決して言った。
「誰か知り合いがいるのか？」
「いると思う。いや、そう希望している。だから探している」
「誰だ？その写真の人か？」
「そう。父親だ」
「すごい。良い話じゃないか。で親父さんの名前は？」
「ユースフだ。　ユースフ・アルハビブ」
即座に答える。　（写真の裏に記してあった手書きの名前は多分、こう読むのだろう）
「名前までわかっていれば、ギレスンへ行けばすぐわかるさ」
「ありがとう、勇気がわいた」
実際、こんな遠くへきて、見知らぬ人達ばかりのなかで、この男はこうしてやさしくしてくれる。その暖かい心が身にしみた。　だまされたとしても、別に損をするわけではない。雄介は割り切って考えた。

父親がいないことで子供のころよくいじめられた。　愚痴ひとつ言わず母親は働いてくれた。母が支えてくれる生活は貧しかった。貧しさは別に構わないが、そうして働く母親がいじらしかった。彼も高校生時代からアルバイトで稼ぎ、母親を手助けした。それでも金額はたかが知れたものだった。　その度に、彼はまだ見たことのない父親を思い出し、彼を憎んだ。どんな事情があったにしろ一度は愛した女とその子をこれほど苦労させる男が憎かった。
いつか探し出して苦渋を味あわせてやろう、という気持ちが彼を叱咤し、勉学にも打ち込ませた。今彼は、一応プロのカメラマンとして生活には事欠くこともなくなった。
結婚もせずがむしゃらに働き、さあ今から母親にゆっくりとした生活をしてもらおうと思

った矢先に、母親が痴呆症に罹ってしまったのである。 現在は専門の特別養護老人ホームに入所している。

こうして、はるか遠くトルコまで父を探しに来たのはなぜだろう？ 彼自身、自分の真意を計りかねていた。もし生きているのなら父に逢って恨みつらみを言うためだろうか？ 母に逢わせてやろういう気持ちだろうか？ それよりも、本当の所は自分が一体何者なのか、自分のアイデンティティをはっきりさせたかったのではなかろうか。 いずれにしろ、自分に生を与えてくれた男には一度はどうしても逢わねばならないし、その時は今をおいては他にありそうには思えなかったのだ。

下船したギレスンは小さいながらも明るく、小綺麗な町だった。 もう夕暮れ時だった。 燃え立つようなオレンジ色の夕日が西の空へ落ちていく。

桟橋のすぐ前に広場があり、その中央に喫茶店がある。屋外の開放的な喫茶店である。さくらんぼの絵を画いた看板が立っていた。

お土産店や観光案内所もある。まだ人が居る気配である。別に帰り急いでいる風にはみえない。

彼は観光案内所の扉をあけると、さっさと中へ入っていった。

「すみませんが英語で話しができますか？」

唐突に聞いたが、二十二、三才の眉目秀麗な男子所員がにこやかな顔で、

「勿論わかりますよ」

と至極丁寧に答えてくれた。観光で成り立つ国柄はここでも感じられる。こんな風に人々の応対はとても良い。

雄介は写真を見せながら、

「この景色はこの町でしょうか」

と聞くと、店員はすぐさまその写真を手にとり、しげしげと眺め、

「ああ、そうですね。この少し先の埠頭から取ったもののようですね。この遠くに見えている島でわかりますよ。これはギレスン島です」

「そうですか、やはり」

雄介は感激で胸がつまりそうになった。

「やった。ついに見つけた。このトルコまではるばる来てよかった」

感激のあまり不覚にも涙がでてしまった。

「誰かをお探しですか？」

店員は、この立派な男性が涙を浮かべているさまをみて驚いた様子だった。

「このギレスンに、このユースフ・アルハビブと言う人が住んでいませんか。彼を知りませんか？」

彼は首をかしげるようにして、

「さあ、私は知りませんが、何でしたら、この角を曲がったところに郵便局がありますから、明日にでもそこで聞いてみられたらどうですか？」

もっともである。

郵便局のある場所を教えてもらった。今はもう夕方七時近い、局も閉まっている時間である。明日あらためて尋ねることとし、案内所から紹介されたホテルへチェックインした。ほっとすると急に食欲がでてくる。彼は夕食にトルコの魚料理をオーダーした。ボラか何かの白身の魚をトマトソースで煮込んだような一品にごま付きのパン、豆のスープがでてきた。エキゾチックでこの上なく美味しかった。酒は白ワインにした。空腹が満たされると彼は満足し、明日こそは実際の調査に乗り出そうと心は逸った。

朝の郵便局はなかなか忙しい。それでも、はるばる日本から来たという旅行者に対して局は親切に対応してくれた。何よりも、英語の判る女性局員がいてくれたのはありがたかった。写真を見せ、父の名前を告げて尋ねた。

「そうねえ。同じ名前でこの町の町長がいますけど？　この人のことでしょうか？」

「え？　いや、わかりません。で、その人は何処へいけば逢えますか？」

時間はまだ午前八時過ぎだった。もう少し待って、十時頃に行ってみてはと、簡単な町役場迄の地図を画いてもらった。

案外すんなりと反応があって雄介は感激した。

局長からの紹介状を持っていけば町長も逢ってくれるだろうと言って大きな便箋に何やらトルコ語で手紙を書いてくれた。この紹介状を持って町役場の受付員に渡し、アルハビブ町長への面会を申し入れた。

応接間で待たされること約二十分、やがて恰幅の良い上品な紳士、ユースフ・アルハビブ町長が出てきた。年のころは五十才から六十才の間くらい、西欧風の洗練された身のこなしをした彼は先ず、雄介に椅子を勧め、みずからもその前の席に座った。　それからやおら向き直り、

「で、どういうご用ですか？」

おっとりしている。きれいな、英国仕込みとも思える英語はなまりがあまりなかった。

「私は日本人です。　でも父親はトルコ人で、このギレスン住んでいる筈なのです。これが彼の若い頃の写真です。　もしかして、あなたが・・」

彼は両手を左右に広げ肩をすくめて首を振った。

「いいえ違います」

彼は続けた。

「私は日本へも行ったことがないし、心あたりはまったくありません」

気の毒そうな表情で言うのだ。

雄介の顔には落胆の表情が走った。

「そうですか」

雄介が何故ここへ来たのかをかいつまんで話すと、このアルハビブ氏は

「お気の毒に」

と同情し、

「私もお手伝いしましょう。一緒に探してあげます。見つかるまで私の家に泊まってください」

とまで言ってくれた。

その後、役場の事務員に言いつけて、他のユースフ・アルハビブ氏がいないかどうかを調査させた。

トルコには日本のように戸籍といったものがない。

しかし、役場には区域ごとに住民の台帳は完備されている。三十分もすると先ほどの女子職員がもう一名のユースフ・アルハビブ氏の記録を持ってきた。

同姓同名のユースフ・アルハビブ氏が見つかったのだ。

早速呼び出しがなされた。アルハビブ氏が役場を訪れたのはそれから二日後の午後二時だった。この国ではすべて物事がゆっくりと運ぶ。　出頭するのに二日かかったとしてもそれは格別

に異常なことではない。そういう国柄なのである。

いよいよ面会の日、雄介は緊張して落ち着かず、しつらえてもらった会議室の中でもあたりをうろうろと歩き回った。

やがて扉が静かに開き、当の人物が入ってきた。　ゆっくりとした、というより、そろそろと探るような足取りだ。

雄介は彼の姿を見て、心の中であっと叫んだ。　盲いていたのだ。　年の頃なら六十才代後半から七十才くらいで、やせて背が高い。　杖をつき、娘らしい若い女性に手を引かれて入ってきた。

入るなり彼は叫んだ。

「私は日本に住んだことがあります。　私のもう一つの家族が日本にいます。若い頃のことです」

涙がその痩せた顔を伝って落ちた。

たどたどしいがはっきりした日本語だった。

「では、あなたが・・・」

雄介の心の中で、憎しみの感情がガラガラと崩れ落ちていった。彼は失明している。　どういう経過でそうなったかは判らないが、これでは日本へ帰ろうにも帰れまい。身なりはそこそこであったが、決して立派とは言えない。

しかし、その物静かな態度は彼の人柄を表しているようだった。年老いた学者のような思慮深い顔つきだ。

「あなたが尚美の息子？」

手をさしのべて雄介の体を触ろうとする。

「はい、雄介といいます」

「雄介？　ああ良い名前だ」

「いつかきっと日本へいき、尚美にも逢います。これまでの仕打ちをお詫びします」

彼は涙で声をつまらせていた。

その場にいた一人の娘も、数奇な運命でつながる異母兄の雄介を見て何かを言いたげであった。ただ英語が話せないだけにもどかしさもひとしおなのだ。

その夜、親子三人は町長の自宅にお世話になり、広い一室で心ゆくまで話をした。これまでの生い立ち、生活のこと、現在の仕事のことなどを雄介は次々と話した。父ユースフは見えぬ目をしばだたきながら聞き入った。また、父は母尚美との出会いをいろいろと語ってくれた。

約四十年前、建築学の勉強のために京都の大学へ留学したのが三十才のときであった。京都の町で道に迷って困っていたとき、片言ながら英語で詳しく教えてくれた可愛い日本女性がいた。いろいろと話しをするうちに、ユースフはこの若い日本女性、八坂尚美にどんどんと惹かれていった。単なるもの珍しさからではなく、同じものを素晴らしいと思い、同じものに感動し合える数少ない友人といった感情を彼女に見出したのだ。

彼女の方も、極東の自分たちと同じ感情をもった知的な男性に魅力を感じ、出会ってすぐから彼に思いをよせるようになったという。日本に永住するつもりで尚美と一緒に下町の、とあるしもたやの二階を借りて住み始め、やがて男児が生まれた。正式に結婚するために、一度トルコへ帰り、家族の了解も得た上で、もう一度日本へ帰るつもりであった。ビザ更新もあったし、どうしても一度国外へ出て、再入国する必要があったのだ。その時に自国で交通事故に逢った。

一命は取り留めたものの、それから長期間彼は病院で治療を受けなければならなかった。さらに追い討ちをかけるように、悪夢が襲った。視神経をやられ失明してしまったのだ。その上に追突された衝撃で彼は記憶までも失ってしまったのだ。

長い間、ユースフは、自分が日本にいたことも思い出せなかった。トルコに帰り、親元で治療を受けていたときに幼馴染の女性との結婚話が持ちあがった。この国では、日本と同様に、見合い結婚も多い。

目も見えず、過去の記憶も定かではない彼はこの彼女の助けがありがたかった。年老いた両親の生活もあった。ユースフの妻は実家がギレスンで雑貨店を経営していた。かくしてユースフも、この故郷で体の養生をしながら店を守り、数十年が経ってしまったのだ。

彼は日ごろから不審に思うことがあった。手首にゴールドのブレスレットをしていたがこれを何時つけたのかと、常に不思議に思っていた。メッキだったが金色は美しく、チェーンに小さなハートが付いていた。それも完全なハートではなく半分に割れているものだった。どういう理由で自分がこんなブレスレットを身につけているのか判らなかった。やがてそれも貴重品を保管す

る金庫に入れたままにしておいたが、どうしたわけか、時々それを思い出した。
日本に住んでいたこと、子供をもうけていたことを彼が急に思い出したのは、自分の子供達が成人して孫が生まれた頃だった。「ナオミ」という名前は、彼が無意識で口走ったのを妻が聞いて、あとで教えてくれたと言う。
ユースフは、老いた体をすくめるようにして、雄介の前に ひれ伏すように身を屈め、頭を下げた。
「すまない。すまない」
の語が父の口をついて出てくる。日本語が少しずつ滑らかに口をついて出るようになってきた。
ユースフはポケットを探り、白い紙に包んだものを大事そうに取り出した。 それは、あのブレスレットだった。小さなハート（ブロークンハート）が付いていた。
今度は雄介がポケットから、金色のペンダントを取り出した。同じようなハートがついている。雄介はその半分をユースフの手にあるハートと合わせた。二つは完全に適合した。四十年近い年月をへて、このふたつの愛の証が一つになった。これは、あの写真と同じ小物入れの抽斗の中で雄介が見つけ、なぜかはわからないが、一緒に持って来たものだった。

存分に話しあった後は、これまでの三十有余年、心にためてきた思いがすっかり、嘘のように心から消えているのを雄介は不思議な感覚で意識していた。
「許してくれるか」
父の言葉に雄介は、
「運命なんだ。仕方がなかったんだよ。 もういいんだ。 うらんでなんかいない」
と答えた。
ただ母の病気のことだけは言い出しにくく、言葉が滑らかに出なかった。
「多分もう尚美は結婚して幸せになっているのでしょう」
父の言葉に雄介は、
「はい。もう昔のことはなるべく思い出さないようにしているみたいです」
とあたり障りのない言い方をした。 父の方も、それ以上は深く追求することもできず、
「元気にしていてくれればそれで充分です」
と言った。
帰途、アンカラ空港へ向かうウルソイ・バス（長距離バス）のオフィスで彼は父親の肩を抱いた。

やせた骨格だったが、どこか温かく、同じ血が通っているのかと思うと心が安らかになった。
「お父さん、また逢おう、元気でね」
「ありがとう。君も立派になっていて本当に嬉しい。どうかこの上も成功してくれ。お母さんによろしく伝えて・・・」
言葉が途切れてしまった。父は泣いていた。
数奇な運命にもてあそばれた異国の父が雄介にはとてもいとおしいものに感じられた。異母妹のチュリンが低い声で、
『ギュレ ギュレ(さようなら)』
と言い彼の胸にすがった。雄介は彼女の肩を抱いた。彼女の目にも涙が光っていた。また逢えるかどうか判らない。それほどそれぞれの国は遠く隔たっている。
「ありがとう。あなたたちと逢えて本当によかった。一生忘れない」
雄介も涙を抑えるのが大変だった。

帰路の飛行機の中でも雄介は夢見心地だった。
はじめて見たまぶたの父だった。写真にも収めた。母にもみせてやろう。きっと思い出すかも知れない。
(やっぱり僕にはトルコ人の血が流れていたのか。そして良くぞ父を探しあてたものだ)我ながらよくやったものだと感激した。
(母には何と説明しよう? 分かってくれるのか? それともみんな忘れてしまっているのだろうか) 三十五年も逢わなければもうすっかり他人と同じというだろうか。彼は急に不安になり、つい昨日の父との再会が実は夢だったのではないか、などと思えてきたりした。

帰国後雄介は母が入所しているホームを訪れた。
日当たりのよい小高い丘の上にあるホームの周囲の木々はもうすっかり緑色が深くなっていた。これから暑い夏を迎えることだろう。
玄関を入るとすぐ右手に大食堂がある。まだ食事の時間ではないのでガランとしていた。すぐ横のエレベーターで二階へあがる。広い廊下の角に応接セットがおかれ、老女が三人ばかりで、何やら手芸をしていた。煙草の箱をたくさん集めて継ぎ足し、鶴のような形の鳥を作っていた。楽しそうな笑い声が聞こえた。このそばを通り過ぎ、廊下を左にまがると右側に二一三号室がある。

自室で母は緑色のガウンを着て、穏やかな笑みをうかべ、テレビに見入っていた。　雄介は問いかけた。

「おかあさん。　お父さんのこと覚えている？」

雄介が持ってきた水羊羹の小さな一切れを口に運びながら母は、

「憶えているわよ。でもどんな顔をしていたか、ちょっとわからないわ」

柔らかな笑みを浮かべながら彼女は平然と言う。

「そうか。　名前はなんだったかな？」

「名前？　誰の？」

「誰のって、お父さんのだよ」

「お父さん？ああ、お父さんねえ・・・　なんと言う人だったか、今ちょっと度忘れ・・・」

言いながら彼女は湯のみに残ったお茶を静かに口に含んだ。

暫くしてまた彼女は静かな口調で言った。

「あなたは雄介だよね。　そうでしょう？　そうよね。お父さんも雄介だったかも知れない」

雄介という名前も、ユースフから来ているのか、彼はふとそんな気がした。

雄介は両手で老いた母の細い手を握りしめて、やさしく言った。

「きっとおかあさんは僕の名前をお父さんの名前からとったのだね。わかるよ」

母を今更、遠く離れた国のユースフに逢わせても思い出すことはないのではないかと思う。いや、むしろ思い出させないままそっとしておくのが彼女にとってもいいのではないのかと思う。父には現在の家族がいる。それなりに静かに過ごしている。　いまさら名乗っていって先方の家族に迷惑をかけたところで何が得られるというのだ。　このままそっとしておいて、どちら側にも波風を立てず、二人それぞれに静かに余生を送らせてあげる方がいいのかも知れない。思い出は思い出として心の隅に留めておけば良い。いまさら異国の父や異母妹の生活を乱すことはない、自分のルーツが分かれば良いのだ。　雄介は今心安らかにそう思う。

あの黒海の小さな港町でやさしい家族に守られて暮らす父のことはもう恨みには思うまいと彼は心に誓った。

私はあくまでも私、トルコ人の血は半分流れているかもしれないが、八坂尚美のひとり息子の雄介だ。この人生は私に日本人としての命を与えてくれた。だからその人生をまっとうすれば良いのだ。

ホームの中庭は明るくもうすっかり初夏だった。

母の散歩に付き添って歩く雄介は沈む夕日に背を向けて母を日光からかばいつつ、トルコ旅行で見た様々な光景を思いだしていた。

あのボスポラス海峡に吹く風、沈む夕陽のことも思い出した。それから、あの寒々と暮れていったギレスンの町、そこに住む暖かい心の人々のことも思った。眉目秀麗な案内所の所員、英語のうまかった郵便局の女性局員、とりわけやさしくしてもらった父と同姓同名のユースフ・アルハビブ町長・・・

それら一切は彼の心の中に鮮やかな一連のパノラマ写真の画像のように焼き付いている。きっと一生彼は忘れることはないだろう。　また何時の日訪れるかわからない父の国、遥かなギレスン、我が心のギレスンよ、どうか父を何時までも守ってくださいと、彼は夕陽に向かって祈った。

おわり